

## 福島敏夫随筆集

### 「乙戸南雑話「花鳥風月及び星・虹を愛でながら」から

#### 主宰論説 33

##### 冬の風物と海の幸

木枯らしが、吹き抜け、落ち葉が、舞い上がる、初冬の季節となった。冬の風物に目を向けてみたい。

まず、花であるが、冬に咲く花は、他の季節のそれと比べると、かなり少ないようだ。それでも、紅、ピンク、白色などの満開のシクラメンの花が、鉢植えの形で、提供され、冬の居室に色合いをもたらしているようだ。わが自宅の玄関のポーチのジャコバ・サボテンの鉢植えも、ピンク色のつぼみを付け始めている。クリスマス・ローズ、アネモネ、パンジーなどの花も、ガーデニングの花種の中で見かけるようである。外に目を転じると、家の近くを散歩中に、民家の生垣や、乙戸南公園の街路樹を形成している山茶花の木は、赤や白の花が、鮮やかな色合いを増し、満開近くなっていることに気がついた。また、小菊の白い花、季節遅れの冬バラの深紅色の花、マリー・ゴールドの橙色の花も、民家の塀際で、満開である。気を付けてみると、結構、「冬に咲く花」も多いようである。間もなく、年明けには、水仙、椿、臘梅も、咲き出すだろう。

他方、冬の海の幸にも、目を向けてみたい。定番の海の幸としては、カニ（タラバガニ、毛ガニ、花咲ガニ、ズワイガニなど、幾つかの種類がある。日本海のズワイガニには、松葉ガニ、越前ガニ、加能ガニ、越後本ズワイガニなど、産地により違う名前がついている、紅ズワイガニは、富山湾の固有種である。）、サケ・マス、イカ、タコ、アカムツ、寒ブリなどがあげられる。これらの魚介類は、今が、出荷が盛んであり、いろいろな食卓や宴席を賑わせているようである。乱獲や、海水温の変調、海洋汚染などで、生息が制限され、冬の海の幸が、出回ることがなくならないように願いたいものである（最近、ハタハタなど、水揚げが回復中と言われるものもあるが、多くは、水産資源枯渇の故か、漁獲量は、低下気味のようだ）。

天空のショーとしては、夜空は、冬の星座になり、オリオン座とスバル星が目立つ季節である。また、寒月（コールド・ムーン）が、煌々と輝き、心なしか、黄色に青みが増すように感じられる。師走の夜空では、ふたご座流星群が、盛んであるようだ。今年も間もなく終わりに近くなる。星に何を祈るか、意見が分かれるところかもしれない。

自由俳句：

寒月やひっそりと咲くカスミ草

令和4年12月11日

## 音と映像と詩歌

昔は、映画や踊りなどを除き、音と映像は、独立的に、無関係に取り扱われてきた。音も、川のせせらぎ、鳥のさえずり、セミや鈴虫の鳴き声、などの自然の音もあるが、風鈴、鐘の音、いろいろな楽器の奏でる人工音もある。映像も、虹、星、月など、自然に目にはいる映像の他に、人間の創作による人工映像もある。最近では、技術的革新により、両方とも、高性能化するとともに、ビデオ等の音と映像のコラボレーションすなわち協奏方式が、盛んである。新型コロナウイルス流行前は、華やかな LIVE ショーで、光によるライトアップの映像と音の協奏方式があったようだ。

いろいろな形で、各種の動画も、SNS や YouTube で流れているようである。活字の字幕付きのものもあるようだ。ただ、合成音による歌、人工知能による人工合成画像なども、出回るようになり、バラエティーに富んでいるが、著作権などの知的財産権には、十分な配慮を願いたいものである。フェイク・ニュースに躍らせられないように、判断力を養っておくことも必要であると感じるところである。

他方、詩歌の形で、意見等を表す方法は、古今東西多いが、今もなお、長年使われている手法である。最近、デジタル化が進展する中で、書籍の形の活字文化の危機が叫ばれている。しかし、言葉で考え、言葉で伝えるのは、人間の誕生以来、火と道具とともに、3大文化的遺産だから、大事にすべきであると思われる。漢詩、西洋詩、日本詩、短歌、俳句などでは、定型のものが大部分であるが、自由詩、自由短歌、自由俳句などもあるようだ。ただ、名人域に至るには、技巧にばかり走らず、感性と理性の玄妙な調和が必要であると言われるようである。いろいろな音、映像、詩歌があるが、感動をもたらすものであることが基本のようである。

自由短歌:

はるかなる遠い国の夜空でも冬の星座は輝ける

令和4年12月11日